

# 新刊図書の紹介

## 日本における内陸水運の歴史及び現在、未来

### 内陸水運への招待 ～内陸水運の復活に向けて～

江戸時代から大正初期にかけて盛んだった日本の内陸水運(河川舟運)は、鉄道や自動車交通の発展により昭和初期には衰退してしまった。現在では渡舟、観光船、運搬船、という形で各地に細々と残されているにすぎない。

しかし、近年、省エネルギーで環境にやさしい交通であるという面や、地震による陸上交通網が分断された際の物資輸送機能などの防災面、他にもレクリエーション、観光、まちづくりなどの多様な機能を有する水上交通として、内陸水運が見直されてきている。

平成15年3月に京都、滋賀、大阪で開催された第3回世界水フォーラムでは、今後の水問題の議論の視点として、内陸水運をテーマにした“水と交通”が開催され、国内外を問わず内陸水運に関する関心が高まってきている。

本書の内容は、我が国における古代から近代までの各地域における内陸水運の歴史・文化の概要、内陸水運の現状及びヨーロッパやアジアでの内陸水運の紹介とつづき、それを受け、行政や市民団体等による内陸水運の復活に向けての様々な取り組みを紹介している。

本書により日本各地における歴史・文化面からの内陸水運の役割を見つめ直すと同時に、内陸水運が有する多様で多面的な機能によって地球環境問題などの社会をとりまく諸問題解決の糸口として注目されることを期待するものである。



編集・発行：(財)リバーフロント  
整備センター  
A4版 214頁

## もっとも身近な水辺空間“水路”について考える。

### 暮らしを潤す身近な水路 ～心ひかれる、水辺空間～

「かつてある地方都市を訪れたとき、町中の小さな水路に水が勢いよく流れている光景を目にした。水がきらきらと輝き、まるで意志をもって流れているかのように巧みに分水されていく様に驚嘆したが、水路に惹かれたきっかけであった。」(～あとがき～より)

“水路”は暮らしのなかで最も身近な水辺空間であり、飲料、農業、舟運、防火、親水、風景、等多様な機能を有し、地域の歴史、文化、生活及びその時代の技術などの影響により形成されている。

“水路”はあまりに身近であるゆえ、人々にあまり意識されることなく、それでいて地域に根付いた落ち着きとうるおいをもたらす空間である。

本書はそんな“水路”に注目し、平成11年から平成14年まで、東北、関東、北陸、近畿、四国、九州のおよそ50市町村について現地調査を行い、多くの魅力的な水路について得られた情報を多数の写真を使って紹介している。これらを、「水路のもつ魅力」や「水路の変遷」及び「これからの水路」についてまとめたものである。

本書を読むと、日本各地には、まだこんなに魅力的な水路空間があるのかと再認識させられ、出張、旅行などの際に、訪れてみたいと思わせる一冊である。なお、本書では次のように水路を広く定義している。

- ・ 人が水を利用する事を目的に開削したもの。
- ・ 洪水の流下を主目的としていないこと。



編集：水路研究会  
発行：(財)リバーフロント  
整備センター  
A5版 120頁